

主 題：新しくされた者の新たな生き方

聖書箇所：コロサイ人への手紙 3章1－4節

テーマ：キリストによって新しくされた者はどのような生き方をしていくのか？

今朝、皆さんと見ていきたいのは、コロサイ人への手紙3：1－4のみことばです。先週お伝えしたように、きょうから私たちは1－2章を通して学んだ教理に基づくより実践的な教えを、3章から学んでいきたいと思えます。もちろんこれまでに学んできた真理も、そのすべてが私たちにとって欠かすことのできない、生きた力ある神様のことばでした。でも、ここからさらにそれぞれの歩みに密接に関わる神様の知恵を見ていきたいと思えます。続けて、みことばの教えによく耳を傾けてみましょう。

コロサイ3：1－4

「:1 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。:2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。:3 あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。:4 私たちのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます。」

さて、きょう考えたいことは、タイトルにもあるように“新しくされた者の新たな生き方”です。そのことを考えていくに当たって、改めてここで、あなたにとってイエス・キリストは十分な存在でしょうかという一つの問いを考えてみてください。この方こそ自分にとってのすべてだと考えて、そのとおりに今を生活しているでしょうか——。多くの人が「はい」と答えるかもしれませんが、でも、果たして実際に日々の歩みはその思いを、その信仰を反映したものでしょうか？少し自分の生活を振り返ってみてください。普段何も無い時には、私たちはキリストがいれば十分です、私はこの方にあって喜びと満足に満ちあふれて、平安を持って生きていくことができますと口にできるかもしれませんが、でも、もし想像もしていなかったような病気や災害が起きたり、家庭や職場で、自分にはどうすることもできない問題が起こって、私たちから希望を奪うような痛みや悲しみが降りかかってきたりしたら、そのときはどのようにふるまうでしょう？イエス・キリストこそ何よりも優れた、自分にとってすべてであると、この方に心を留めているでしょうか？それとも容易に別のものに心を奪われて、目をそらしてしまっていないでしょうか？

正直になれば、私たちは時に主にものみ信頼するということが難しく覚えることがあります。迫り来る問題の大きさに隠れて、キリストが見えなくなってしまう。悲しいことに、私たちはそんな弱さを持っています。またそうやって私たち自身が弱さを抱えているだけではなくて、周りを見渡してみれば、キリストだけでは十分ではないと教える、間違った教えや考え方もあふれていました。先週まで何回かにわたって考えましたけれども、十分なキリストに加えて、人の行いを加えようとする、律法主義と呼ばれるものも、十分なキリストに感情や自分の特別な体験、経験を加えようとする神秘主義、またキリストに苦行を加えようとする禁欲主義といった危険な偽りの教えは、昔も今も変わらずに、さまざまな形で私たちの周りに存在していたのです。これまでに、私たちは繰り返し、コロサイの手紙を通して学んできました。確かに私たちにとってキリストは十分な方です。キリストさえいれば、私たちは必要な物をもうすべて持っています、私たちはパウロのことばを通してそのすばらしさを改めて知ったのです。それなら問われるのは、その十分さを知った私たちがキリストから目をそらさずに、そのキリストを知っている者にふさわしく歩んでいるかどうかです。

○新しくされた者の新たな生き方：

では、その生き方とは、その歩みとは実際にどのようなものなのでしょう？十分なキリストによって救われて、十分なキリストによって新しくされて、そのキリストとともに歩いていくという、その生き方は具体的にどんなものなのでしょう？そのことをパウロは3章のところからわかりやすく描いてくれました。3：1は「こういふので」ということばで始まっていました。パウロは1－2章のところ、いかにキリストが十分なお方なのかということ語り続けてきました。それを知ったのなら、「こういふので」歩いて行きなさいと教えているのです。きょうはその歩みの最初、キリストのすばらしさ、十分さを知って、新しくされた者の新たな生き方、特に新しくされた者が持っている責任と希望について、1－4節で考えてみたいと思います。

ですから、このみことばを通して、十分なキリストを知っている者がどんな歩みをしていくことができるのかということをよく考えてみてください。そして、その歩みと今の自分自身の歩みを比べてみてください。果たしてみことばが教えているような歩みを自分自身が今しているのかどうか、そのような者へと変わり続けているのか、成長しているのか、それともまだその歩みをし始めていないのか？そのことをぜひよく考えてみてください。このことばが皆さんの励ましになることを心から祈っています。

1. 新しくされた者の責任 1－2節

1) 上にあるものを求める 1節

パウロは1－2節の中で、特に二つの責任を挙げていました。まず1節「こういふので、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。」と始まっています。キリストによって新しくされた者の一つ目の責任は、「上にあるものを求め」るということです。恵みによって罪を赦されて、新しく造り変えられた者は上にあるものを求める、そんな新たな生き方をするようになったのだとパウロは教えていました。

ここで「求めなさい」ということばが出てきていますが、これにはもともと「何かを熱心に手にしようとする」とか、「願いや目標を実現しようと懸命な努力をする」といった意味が含まれています。つまり何となく気が向いた時だけ、気のおもむくままに求めるような態度ではありません。このことばは、何かをただひたすらに一生懸命に探し求めようとする態度を表しているのです。これだけでも少しイメージできるかもしれませんが、別の箇所を見てみれば、よりイメージがつかみやすいかもしれません。例えば、過ぎ越しの祭りに行ったエルサレムにあって、イエス様を見失って捜し回っていた両親、ヨセフとマリアの様子を表すことばにも、これは使われていました。ルカ2：48にこう書いています。「両親は彼を見て驚き、母は言った。「まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです。」」と。この最後の「捜し回っていたのです」、これが同じことばが使われていました。またこのことばは、家の中で大切な銀貨を1枚失って、それを捜し求める女性の様子を表すのにも使われていました。それがルカ15：8に出てきます。そこに「また、女の人が銀貨を十枚持っていて、もしその一枚をなくしたら、あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしようか。」と書いていました。この「捜さないでしようか」ということばに同じことばが使われていました。

もしかしたら皆さんも経験したことがあるかもしれません。自分自身の愛するわが子を一瞬でも失ってしまった親の様子、一日の稼ぎに相当する銀貨をなくしてしまった貧しい女性。間違いなくどちらも、時間があるときに捜せばいいか、そのうち見つければ大丈夫でしょうという態度ではないのです。子どもを見失ってしまったら、お金をなくしてしまったら、たとえほかにやるべきことがあったとしても、やりたいことがあったとしても、すべて横に置いて、ただ失ったものを真っ先に捜そうとしましょう。そういったなりふり構わない必死な態度こそ、ここで言われていた「求めなさい」ということばの持っている意味でした。ちなみにここで使われていた「求めなさい」ということばには、これまでに何度も触れてきた継続を表す現在形が使われています。つまりこの「求めなさい」という責任は、一度きりの

ものではなく、時々気が向いたときに行うものでもない。どんなときであろうとも、新しくされた者は上にあるものをただひたすら懸命に求めていこうとするのです。

さあ、自分自身の歩みと比べて考えてみましょう。私たちは今、こんな熱意を、こんな賢明さを果たして持っているのでしょうか？でもここまで聞いてきて、先ほどから「上にあるもの」と言っているけれども、そもそもそれは何のことなのかという疑問が浮かんでいる人もいるでしょう。具体的に何を求めようと言っているのでしょうか？パウロはその答えを3：1の続きに「そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。」と書いていました。簡潔に言うのであれば、これは天におられるイエス・キリストを日々求め続けていくということです。もっと言うと、新しくされた者は天で統治者として、支配者として、主権者として君臨されているキリストの支配を自分の歩みのうちに求め続けていくということです。主権者であるキリストの御手に、自分自身の歩みを委ねることを熱心に求め続けていくのです。

このことをより理解する上で鍵となる大切なことばがあります。パウロはここで、「上にあるものを求めなさい、そこにはキリストがおられます」と単純に言っていませんでした。パウロは「上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられ」と言っていたのです。キリストはまさに今、神の右の座を占めておられると言うのです。そして、これは非常に重要なことでした。というのも、この事実こそキリストが救い主として、その働きのすべてを成し遂げられたことを意味するからでした。かつて旧約の時代、神様によって選ばれた祭司たちは、罪の贖いのために、ささげ物やいけにえをささげ続けていました。血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しがないと言われていたとおり、彼らは民に代わって、神様の前にいけにえを日々ささげ続けていたのです。でも、残念ながらそのようなささげ物は幾らささげたとしても、人の罪を完全に拭き去ることはできませんでした。彼らの働きには終わりがありませんでした。祭司たちはずっと座ることができなかつたのです。でもキリストは座られました。ただ、一度罪を取り除くためのいけにえとして、ご自身を十字架でささげられたこのお方は、完全な罪の赦しをもう既に成し遂げられたのです。だから座られました。ゴルゴダの丘で「完了した」と叫ばれた神の御子は、確かに救いのみわざを完成されたまことの救い主でした。そしてすべてを成し遂げられたこのお方は、ただ死んで終わりではありません。約束どおり3日目によみがえり、今まさに神の右の座についておられると言うのです。

みことばはそのことをいろいろな場所で繰り返し言っていました。例えば、ヘブル1：3でも、「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」と書いています。もう一つだけIペテロ3：22には「キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの權威と権力を従えて、神の右の座におられます。」と書いています。すごいことが書かれていると思いませんか？救いを完成されたイエス・キリストは、これから右の座に着こうとしているではありません。今まさに着こうとしているのではありません。もうすでにそこに着いておられると言うのです。そしてそのイエス様が着いている場所、「神の右の座」というのは、ほかに並ぶものがない最高の權威、最高の力、稱賛を表していました。要するに救いを完成された救い主、イエス・キリストは最もすぐれた第一の地位に今着いておられるということです。この世のすべてを統治される王の王、主の主として変わらずに今も君臨されているのです。そしてその偉大なキリストを、パウロは日々熱心に追い求めていくようにと求めていました。それぞれの歩みが自分の考えや思いに支配されるのではなく、キリストの考えや知恵にますます支配されるようになることを求めていたのです。

この点において、マッカーサー先生も次のように説明していました。「天に没頭するというのは、そこに君臨しておられるお方、その方の意志、計画、備え、力にいつも考えを巡らせていることです。また、それはこの世のモノ、人、出来事をキリストの目を通して、永遠の視点で考えることでもあるのです。」と。君臨しておられるお方に、この方の意志に、この方の計画に、この方の力に心を留め続ける

のです。自分のこととして考えてみてください。先週または一月前でもいいです、自分自身の日々の歩みを振り返ったときに、私たちはいったいだれに思いをめぐらせているでしょう？だれに思いをめぐらせることに熱心になっているでしょう？自分自身でしょうか？それとも主権者であられるキリストでしょうか？いったい何を頼りとして、何に従うことに懸命になって歩んでいるでしょう？自分の思いや自分の感情、自分の立てた計画などが自分にとって譲ることのできない一番のものとなり続けているのでしょうか？それともキリストのご計画やキリストの知恵、キリストの力が自分にとって一番のものとなり続けているのでしょうか？果たして“自分が”ではなくて、すべてを支配されているキリストに身をゆだねて、キリストに忠実に歩む者として日々変えられ続けているのでしょうか？子どもを失った親が捜すように、銀貨を失った女性が探すように、そのことを懸命に求めているのでしょうか？パウロは上にあるものを熱心に求め続けていました。救いを成し遂げられたキリストは、今もなおすべてを支配されている王の王です。そして感謝なことに、私たちはこの方に信頼して生きていくことができます。この方の支配に身をゆだねて歩いていくことができます。だからこそ自分の思いではなくて、この方の完全なみこころを追い求めて、自分の感情や自分の知恵ではなくて、この方の十分な知恵を追い求めて、自分の喜びではなくて、この方の喜ばれることを何よりも追い求めていくことです。そして、それをするためには、私たちはますますキリストを知る必要があります。みことばを学んで、みことばに心を留めて、キリストに身をゆだねる者として熱心に歩いていくのです。それこそがキリストによって新しくされた者の一つ目の責任でした。

2) 天にあるものを思う 2節

これに加えて、新しくされた者の二つ目の責任が2節に挙げられていました。2節に「あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」と書いてあります。キリストによって新しくされた者の二つ目の責任は、「天にあるものを思」うということです。求めていくだけではありません。思っていくのです。新しく造り変えられた者は、地上のものにとられるのではなくて、天にあるものを思う、そういう生き方をしていくのだと言うのです。求めていくということと、思うということは似ているように思うかもしれませんが。この「思いなさい」ということばは、もともと何かを文字どおり思うとか、注意深く考えるといった知的な意味に加えて、何かをしようと心に決めるといった意志の意味も含まれています。要するに、このことばは、単に頭で知的に天にあるものを考えようとするだけではなくて、意志をもって、それに心を定めようとする、そういった人の内側の態度を表しているのです。求めるということが少し外側の話をしているのだとしたら、この思うというのは、天にあるものに心を定めようとする、そういった内側の態度を表していました。また、このことばにも同じく継続を表す現在形が使われていました。ということは、新しくされた者は、地上のものにではなくて、天にあるものに一時的にではなく、どんなときも思いを留め続けていこうとするということです。この世のものを思うのではなくて、日々キリストに心を定めて、キリストのことを常に考えながら歩いていくと言うのです。

皆さん、昨日、どれだけキリストのことを考えていました？どれだけの時間、私たちはキリストのことに心を定めていました？どれだけの時間、それ以外のものに時間を費やしてしまいました？パウロは、この世のものを思わず、キリストを常に考えながら、心を定めながら歩いていくのだと言っていました。ただ、ここで勘違いしてほしくないのは、パウロが地上のものを思わずと命じていたときに、これは私たちがこの世にあって与えられている責任を全部ないがしろにしているという勧めをしていたわけではありませんでした。天のことで頭がいっぱいなので、地上のことは手につきません、この世での生活はもう全部適当で、すべてほったらかしにしているという教えられていたのではないのです。そうではなくて、むしろみことばは繰り返しこの世にあって、私たちが忠実に働いて、いろいろな責任に対して誠実であることも求めていました。箴言10：4に「無精者の手は人を貧乏にし、勤勉な者の手は人を富ます。」と書いていました。またこのコロサイの手紙を書いていたパウロ自身も、コロサイではなくて、

テサロニケの人々に対して、Ⅱテサロニケ3：11-12で「11 ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締めりのない歩み方をしている人たちがいると聞いています。12 こういう人たちには、主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。」と口にしていました。これは今の私たちにとっても同じです。私たちだって神様からさまざまなものを与えられています。家族にしても、それぞれに与えられている仕事にしても、学校であろうが、教会のことであろうが、時間であろうが、お金のことであろうが、いろいろなものを私たちは神様からすべて恵みによって与えられているのです。恵みによって与えられるそれら一つ一つのものに対して、私たちが忠実であり続けるということは、私たちにとって大事な責任でした。

では、ここで地上のものを思わず、天にあるものを思い続けると言ったときに、いったい何を意味しているのでしょうか？ここでのポイントは、私たちの考えや心が、何に一番支配されているのかということです。それが問われているということです。わかりやすくATロバートソンという注解者も、こんなふうには言っていました。「私たちが何を考えるかは重要であり、私たちは自分の考えに責任があります。パウロは、地上のことを一切考えるべきでないと言っているのではなく、それが私たちの目的、目標、主人であってはならないと言っているのです。クリスチャンは足は地上に、頭は天に置いておかなければならないのです。」と。私たちが何に思いをめぐらせ続けているのかということは、もう言うまでもなく、私たちにとって必要不可欠です。それは、人のうちにある考えや思いが、その人の行動に大きな影響をもたらすからです。それは私たちひとりひとりがよく知っています。例えば人に対してイライラする思いをめぐらせていたら、そのことばは、その行為は相手に対してきつくなります。自分自身は正しいという思いを抱き続けていれば、自分の間違いを認めようとしなかったり、相手を非難したりすることになります。また、そういった考えが、もしお金や持ち物のことでいっぱいになっていたら、その人は分け与えることよりも、自分が欲しているものをどんな手段を使ってでも手に入れようとするでしょう。何を考え続けているのかということは、私たちにとって重要なことでした。もしキリストやみことばを除いて、この世のことに心や考えをとらわれ続けているのであれば、その歩みは、当然、その考えと思いを反映するものになっていくのです。でも、私たちが日々の生活の中であって、キリストの姿に目をとめて、キリストの愛の偉大さを覚え続けていて、キリストの忍耐深さ、寛容さを心に留め続け、キリストの正しさやキリストの聖さに心を定め続けていたら、どうなるでしょう？その歩みは当然キリストに似たものへと変えられていくのです。だから私たちの心が何に支配されているのかということは重要なことでした。新しくされた者にとって、いったい何に心を留め続けて、いったい何に考えをめぐらせ続けているのかということは大切な責任だったのです。

だとすると、私たちの心は今何に支配されているのでしょうか？先週1週間の歩みを振り返って、私たちの心はいったい何に囚われ続けていたのでしょうか？地上のものに囚われ続けていたのでしょうか？それとも天にあるものをいつも思い続けようとしていたのでしょうか？私たちが知っているのは、私たちの周りにはキリストから目を奪おうとする誘惑がたくさんあふれているということです。私たちが自分の考えを守ろうとせずに、なすがままにさせていたら、そういった誘惑にすぐ流されて、私たちの思いはいろいろなものにとらわれてしまいます。そういった誘惑にいつも私たちは流されていくだけでしょいか？それともみずからの意志でそれを拒み、みことばを心に蓄えながら、ただキリストに思いを留め続けて、歩んでいこうとしているのでしょうか？パウロは地上のものを思わないで、天にあるものを思い続けなさいと求めていました。一時的で、滅んでしまうようなこの世のものではなくて、永遠に価値のあるものに心を定めて生き続けていくのです。いつもキリストの偉大な姿に思いを留めて、キリストに思いをめぐらせながら歩み続けていくことこそが、キリストによって新しくされた者の二つ目の責任でした。

さて、ここまで新しくされた者の二つの責任について一緒に見てきましたが、このような責任にふさわしい歩みをしているのでしょうか？そのような責任にふさわしい歩みへと日々変えられ続けているでし

ようか？キリストに似た者に自分は変わっていきたい、喜ばれる者にますますなっていきたいけれども、実際の歩みは難しい、もしそんなふうに思ったのであれば、パウロのことばにいま一度よく耳を傾けてみてください。パウロは、信仰者の責任を記す前に、あることを言っていました。こんなことばが1節の初めにあります。「こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら」と。残念ながら、このことばではパウロが言わんとしていることがうまく伝わっていません。彼が言いたかったことばを別の形で言い表すなら、ここはこんなふうと言えます。「こういうわけで、あなた方はキリストとともによみがえらされたのだから」と。先週見た2：20ところにも、ここと同じ「もし」ということばが使われていましたが、ここで言っていた「もし」というのは、「もしよみがえったのなら」という仮定の話ではなかったのです。「キリストとともにもうすでによみがえらされたのだから」と、事実を述べていました。その事実の上に、二つの責任は成り立っているのです。これは逆ではありません。私たちがまず上のものを求めていきましょう、そうしたら、私たちがキリストとともによみがえるのではありません。キリストとともによみがえったのであれば、それにふさわしく上にあるものを求めていこうとするのです。

私たちが覚えていなければならないことは、新しくされた者の責任に従って歩いていくことができるというのは、何も私たちのうちに十分な知恵や力があるからではないということです。では、その知恵や力はどこにあるのか——。それはただ十分なキリストのうちにあります。そして、私たちはそんなキリストとともに葬られて、そんなキリストとともによみがえり、そんなキリストとともに一つとされたからこそ、天にあるものを求めていくという歩みが可能になったのです。初めからできたのではありません。決して忘れてはいけません。かつて霊的に死んでいた私たちには、そんな歩みは到底不可能でした。罪に死んでいた以前の私たちはだれもみことばに従おうとせず、福音のメッセージを受け入れようとしませんでした。いや、それ以上にただひたすらに神様に逆らい続けていた私たちは、神様から遠く離れて希望もなく、その罪のゆえに神様の御怒りにのみ値する存在だったのです。でもそんな愚かな私たちを、あわれみ深い神様がただ恵みによって救い出してくださいました。キリストによって罪を赦されて、この方と十字架につけられた私たちの古い自分は死んで、生けるキリストとともに歩む、そんな新しい生き方をする者へと造り変えられたのです。神様によって、その働きがなされたのです。Ⅱコリント5：17にも「だれでもキリストのうちにあれば、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」と書いていました。こうしてキリストとともによみがえらされたのであれば、ただこのキリストにあつて、私たちは新しくされた者として生きていくことができるのです。

だからもしまだ一度もこのキリストを自分のこととして知らない方がいるのであれば、まず何よりもこの方の前に出て、この方のあわれみを求めてください。イエス・キリストこそ、今まさに罪の中に死んでいる、滅びへと向かっているあなたに対して救いを与えることのできる唯一のお方です。どうかそんな偉大な救い主の前に自分の罪を心から悔い改め、この方を自分の救い主として、主として、きょう信じ受け入れてください。ただ、キリストのうちにあれば完全な罪の赦しをきょうあなたのものとしてください。

また今、新しくされた者として、忠実に歩もうとされている皆さん、確かにその歩みにおいて、いろいろな葛藤があります。忠実であろうとすればするほど難しさを覚えることもあります。もし皆さんの中に、このようにして上に求めることをみずから拒み続けている人がいるのであれば、いっさいこのキリストのことを求めようとする思いがないのであれば、よく自分の心を吟味することです。新しく造り変えられた者は、このように生きていくのです。もしそのように生きていく思いが全くないのであれば、その思いをずっと拒み続けているのであれば、自分自身の救いをよく考えてみないといけません。確かに忠実であろうとすれば難しさも覚えます。でも、そんな時こそ思い出すことです。私たちはもう既に

キリストとともによみがえって新しい者とされているということです。私たちが頑張って新しい者になるわけではありません。キリストにあって、私たちは新しく造り変えられたから、天にあるものを求めて生きていこうとするのです。そのようにして、神様によって変えられた者として歩み続けていくのです。そのようなすばらしい神様の働きがもう私たちのうちになされたのであれば、その揺るがぬ事実感謝しながら、上のものを求め続けていくことです。私たちを救い出すこともできたそのすばらしい方の助けと力に拠り頼みながら、与えられた責任に忠実に歩いていくことです。そしてそれでもなお、その歩みに困難を覚えて、悲しみや失意を覚える場面に直面することがあるのなら、きょうの残りのことばをよく覚えておいてください。

2. 新しくされた者の持っている希望 3-4節

1) 神様のうちにいのちが隠されている 3節

パウロは続く3-4節を通して、今度は新しくされた者の持っている希望について触れていました。特に、二つの確固たる希望を信仰者たちに思い出させていました。いったいどんな希望が挙げられていたのか3節を見てください、「あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。」と書いています。キリストによって新しくされた者の持っている一つの希望は、神様のうちにいのちが隠されているということです。

Q “神様のうちにいのちが隠されている”とはどういうことか？

それはいったいどういう意味なのでしょう？大きく二つのことが言えます。

①新しくされた者の歩みは、神様を知らない者には理解できない

もちろん理解できないというのは、私たちが何かしら自分の正体をいつも隠して、クリスチャンであることを内緒にして生きているから、だれも理解することができませんという話ではありません。聖書には信仰者がこの世にあって、世の光として、地の塩として生きていくことを求めていました。だから私たちはことばだけではなく、その日々の歩みを通して、周りの家族や友人に対して、キリストのすばらしさを知らないいろいろな人たちに対して、大胆にキリストのあかしを立てていこうとするのです。では、ここで理解できないというのは、神様を知らない、キリストの価値をわからない者にとって、キリストに価値を置いて歩んでいる者の生き方は、理解できないということです。そのことをまさにパウロがコリントの中で言っていました。Iコリント2：14に「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。」と書いていました。この経験は皆さんもなされたことがあるかもしれません。私たちがどんなときでも神様を一番にして歩いていこうとする姿を見せようとするときに、自分の思いやりやりたいことではなくて、みことばの教えを熱心に追い求めていこうとする姿を見せようとするときに、どうしてそんなふうにするのですか、どうして自分のしたいことをしないのですかと、そのふるまいや決断に疑問を覚えて尋ねてくることもあったかもしれません。キリストを知らない者にとって、自分の人生のすべてをキリストのために捧げて生きていく生き方は、愚かに思えるのです。新しくされた者の歩みは、神様を知らない者には到底理解することはできないという意味にもこのことばは取れます。

②新しくされた者が、神様のうちにあって守られている

もう一つ「隠されて」いるということは、新しくされた者が神様のうちにあって、守られているということです。キリストによって救われて、キリストと一つとされた者の救い、そのいのちは、ほかのだれでもない神様のうちにあって、もう今も守られているということです。私たちのいのちは、私たちの救いは最も安全な場所に保管されている、かくまわれているということです。イエス様がヨハネ10：28-30で「:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。:29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさ

って偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。：30 わたしと父とは一つです。」と言っておられました。すごい約束が書いてありました。どれだけ巨大な敵が迫ってこようと、たとえどれだけサタンが巧な策略を立てたとしても、すべてにまさっておられるその偉大な神様の御手から、私たちの永遠のいのちを奪い去ることができるものは決していないということです。キリストの愛から私たちを引き離すことができるものは何一つないということです。新しくされた者は、そのキリストの守りのうちにあり、そこに私たちは希望を見出して歩み続けていくことができるのです。それが一つ目の希望でした。

2) キリストとともに将来栄光にあずかる 4節

もう一つ最後に、新しくされた者が持っている二つ目の希望が4節に「私たちのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます。」と記されていました。二つ目の希望は、キリストとともに栄光にあずかるということです。新しくされた者は、いつの日かキリストとともに栄光にあずかるという希望を持っています。先ほども見たように、私たちクリスチャンは、確かに今の時代にあってはこの世から理解されなくて、隠れているような存在でした。でも、このような状態がこれから先もずっと続くわけではありません。1度目は救い主としてご自分の国に来られたにも関わらず拒まれ、十字架にかかって死なれたイエス・キリストが、栄光を帯びた王として再びこの地上に帰って来られる、その日は必ずやって来るのです。そのときには、この地上のすべてのものはこのキリストがいったいだれなのかということを目の当たりにして、この方の前にひざまずくようになります。そして同じように、私たちもキリストとともにその正体が明らかにされるのです。4節でパウロは、「もしキリストが現れるなら」とは言っていませんでした。「私たちのいのちであるキリストが現れると」と言ったのです。もちろん具体的にいつ帰ってくるのかはだれにもわかりません。でもパウロはこの方が必ず帰ってこられるということ、必ずそんな日がやって来ることを堅く確信していました。今を生きている私たちひとりひとりも同じ希望を持って生きていくことができます。

Iヨハネ3：2で、ヨハネもこう言っていました。「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」と。確かに私たちは今の世にあって、罪との戦いを経験して苦しみを覚えることがあります。敬虔に生きようとすればするほど、その信仰のゆえに迫害され、周りの人に理解されないこともあります。でもそれもいつまでも続くわけではありません。そんな私たちもいずれキリストのありのままの姿を見るときがやって来るのです。クリスチャンが持っているこの希望は、もしこうなればいいのにとか、こうなるかもしれないといったような不確定なものではありません。私たちのいのちであるキリストは、必ずいつの日にか再び帰って来られます。愛する主とお会いするその日は、一日一日迫っているのです。そしてそのときには私たちの涙は拭われ、重荷は取り除かれ、痛みは取り去られ、キリストのために支払った犠牲はすべて報われるのです。その揺るがない希望を私たちは持っています。天に国籍を置いている者として、私たちは主イエス・キリストがおいでになるのを期待して待ち望むことができるのです。これこそ新しくされた者が持っているすばらしい希望でした。

今朝、私たちは新しくされた者が持っている責任と希望について、それぞれ二つずつ見ました。新しくされた者は、キリストとともに死んでよみがえった者として、神様のうちに守られて、将来キリストとともに栄光にあずかることができるという、この世が絶対に与えることができない最高の希望を持っていました。その希望を覚えるのであれば、その希望に心躍らせるのであれば、私たちはいったい何に心を留めて歩いていこうでしょうか？いったいだれに心を定め続けて生きていこうとしよう？いったい何を熱心に、私たちは求め続けていこうとしよう？私たちの責任は、一時的で消えてしまう地上のものではなくて、永遠に価値のある天にいつも心を留め続けることです。そして忠実に歩み続けて

いくことです。どんなときもただ熱心にキリストを求めて、キリストに思いをめぐらせながら、私たちの愛する救い主イエス・キリストに似た者へと変わるように、ますますともに成長していきましょう。